The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

パスパのアビダルマ理解

三　友　健　容

問題の所在

世界史上，初のユーラシア通商圏を確立したフビライには帝師パスパ（Chos rgyal 'Phags pa, Phags pa bla ma Blo gros rgyal mtshan）がいてモンゴル人たちに佛教を浸透させ，偉大なる功績を後世に残した．パスパはフビライの皇太子真金太子のために『彰所知論』（*Shes bya rab gsal*）を説き，独特のアビダルマを論じている．この書はチベット語で筆記され，のちに沙羅巴によって漢文に翻訳されて，元版大蔵経に納められ今日に伝わっている．漢訳で上下二巻あり，チベット語訳は「サキャ派全集」のなかに，デルゲ版で35葉ある[1]．この論書の研究は1931年に陳寅恪によってなされた[2]のが最初であり，その後1947年にP.C.Bagchiも研究成果を発表したが，いまだチベット語訳のテキストの存在が不明であったころに，漢訳の『彰所知論』から研究をおこなったものである[3]．その後，1983年にConstance Hoogがチベット語訳を入手し発表している[4]．そして1999年にこれらの成果をもとに王啓龍が学位取得論文として出版している[5]が，残念ながら佛教教理の知識が充分でないため内容の吟味までには至っていない．このため2002年に補訂論文を発表し[6]，2006年には沈衛榮が陳寅恪の説に対する反論を行い，同年ロシアのウラジミール・ウスペンスキーがサンクト・ペテルスブルグ大学図書館所蔵のモンゴル語文献の中から発見し，影印本を出版している[7]．

『彰所知論』は漢訳で上下二巻あり，独特のアビダルマ観が述べられているが，教理研究に関してはあまり進んでいない[8]．そこで本論書を調べることによってパスパの思想的背景に迫ろうとするものである．

1．チベット語訳と漢訳におけるタイトルの問題

タイトルは1Aには，サンスクット語書体とチベット語で「三界の衆生の師であるパスパ，智慧の幢相妙祥の〔お方の〕下座の聖典の第一帙からの『彰所知論』

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

khams gsum 'gro ba'i mgon po 'phags pa blo gros rgyal mtshan dpal bzang po'i zhabs kyi gsung rab glegs bam dang po las shes bya rab tu gsal bzhes bya ba bzhugs so」とある．裏面の1Bにはサンスクリット語書体でJñeyaprakāshanāma / namas sarvvabuddhā-bodhisatvebhyaḥとJñitaprakāshanāma / namas sarvvabuddhā-bodhisatvebhyaḥとあり，さらに「インド語でJñeyaprakāshanāma / namas sarvvabuddhā-bodhisatvebhyaḥ, チベット語で所知をよく明らかにするという（shes bya rab tu gsal ba zhe bya ba）．一切の佛陀と菩薩に帰依する（sangs rgyas dang byang chub sems dpa' thams cad la phyag 'tshal lo）」とあり，そのつぎに，「知によって所知をよく観察し（mkhen pas shes bya rab gzigs nas），慈によって衆生に良く示し（brtse bas 'gro la legs ston pa），最勝なる般若に帰依して（shes rab mchog phyag 'tshal nas），所知をよく明らかにすることを説く（shes bya rab tu gsal ba bshad）．器と有情との世間と道とこのような結果と諸の無為法の五種が納められている」となっている．漢訳には，元正奉大夫同知行宣政院事廉復譔とあり，序文が付いているが[9]，チベット語訳にはない．漢訳ではそのあとに「彰所知論卷上 元帝師發合思巴造　宣授江淮福建等處釋教總統法性三藏弘教佛智大師沙羅巴譯　敬禮金剛上師　敬禮諸佛菩薩　遍知見所知．憐憫示群生．敬禮最上智．當演彰所知．謂器情世界．道法與果法．并諸無為法．略攝列為五」とあり，「元帝師發合思巴造　宣授江淮福建等處釋教總統法性三藏弘教佛智大師沙羅巴譯」はチベット語訳には勿論ないが，冒頭部分のその他はほぼ一致する．

漢訳の最終頁は，「彰所知論者．為菩薩真金皇太子求請故．法王上師薩思迦大班彌達足塵頂授比丘發思巴慧幢吉祥賢．時壬寅仲秋下旬有三鬼宿直日．於大吉祥薩思迦法席集竟．持經律論妙音并智．師子筆授」のあとに，讃歎文と真言が記載されているが[10]，チベット語訳にはなく，チベット語訳は「このように『彰所知』というこの論書は，皇太子真金菩薩の要請によって（shes rab tu gsal ba zhe bya ba'i bstan bcos 'di ni rgyal bu byang chub sems dpa' jim gyim gyis bskulba'i don du），永世の無上法をたもつサキャ派の大パンディタの下座の塵を受けた（bla ma chos kyi rjed pa la sa skya paṇḍita chen po'i zhabs rdul spyi bos blangs pa），比丘パスパ，智慧の幢相妙祥という〔者〕によって（dge slong 'phags pa blo gros rgyal mtshan po zhes bya bas）壬寅の歳秋の月23の星が落ちた日（sa pho stag gi lo ston zla 'bring po'i nyi shu gsum skau ma rgyal 'bab pa'i nyin pa）に，吉祥なるサキャ派の大法席が終わった」とあり，チベット語訳，漢訳ともに1302年の9月と思われる秋の23日に『彰所知論』が説き終わったことになっている．しかしこれではパスパの没年1279年あるいは1280年と矛盾することになり，壬寅は戊寅（1278）の間違いだということも言われており，妥当な

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

見方であろう[11]．また，なぜサキャ派のパンディタの下座の塵を受けたパスパという表現があるのかについては，パスパと一緒にフビライに謁見しに行った伯父のサッパンが生前佛法の理論とサキャ派の歴史をパスパに教えておいたのを，パスパが合併し『彰所知論』として真金皇太子に講述したものであろうという意見もあるが[12]，確たる証拠はない[13]．

2．教理的問題

全体を五章に分類し，器世間，有情世間，道法，果法，無為の章にする形式は，現存アビダルマ文献には見当たらない独自の方法である．

第1章の器世間品（Derge.2A ～ 8B, Chos rgyal.p.4-1 ～ 16-5）では，器世間が四大種によって成り立ち，大種の極細なるものが極微であり，七倍毎にそれぞれの大きさが述べられることは『倶舎論』の説明と同じである．この器世間の生成は一切の有情の共業所感であるとして，風輪・水輪・金輪の次第と須弥山を中心とした器世間の山・海・川などの様子が説明されている．但し，有部教学にはない世界観が導入されている．すなわち「南閻浮洲の西に向かってオージャナ（Oḍyana）国があり，大金剛の城（pho brang）という諸の持種（rig pa 'dzin pa）の居住がある．金剛乗の流伝はここから生じたのである．南海の島（lho phyogs rgya mtsho'i gling）にある持船山（ri gru 'dzin）という頂上（rtse mo）に聖なる観音（spyan ras gzigs）自在（dbang phyug）と多羅母（rtsa ba na rje bcun ma sgral ma）居住の場所がある．東方の五峰には聖文殊（'jam dpal）居住の場所がある[14]」としている．

第2章有情世間品（9A — 26B, p.17-1 ～ p.52-3）では，地獄界から天界までを六種とし，八熱地獄，八寒地獄などを詳細に説いて教化的な意図が見られ，有部教学とは根本的に異なるのは非天を第五に数えていることである．非天とは阿修羅のことで，有部では通常，阿修羅道を入れない五道説を採用している[15]．ところが，『彰所知論』では，須弥山の水陸の下一万一千由旬を過ぎたところに光明輝く城があり，ラーフラをはじめとする阿修羅王がいると説明している．

また有情世間について，劫初の有情から説明し出し，人々が田畑を奪い合うのを統率するために，有徳のものを王として選び，釈尊の家系である浄飯，白飯，斛飯，甘露飯の四王子とその子孫に及び，釈迦種族が絶えたあと，仏滅後200年にアショーカ王が現れ，結集の施主となって佛法を興隆し，仏滅後300年にカニシカ王が第三結集の施主となり，仏滅後1千余年に西チベットに初めて王が現れ，呀乞嚟贊普（Khri srong lde btsan）といい，第26代の祫陀朶嚟思顔贊（Lha tho tho ri

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

snyen (snyan) btsan）のときに，佛教がはじめて至り，今に至るまで多くの善知識が教法を流布していると述べている[16]．またこの箇所では漢訳にない文章がチベット語訳テキストに含まれている．すなわち「二十六代ののち，Lha tho tho ri snyen (snyan) btsan という〔王が〕生まれ，このとき佛教〔導入〕の始まりがあった．『無垢女に与える授記の経』(bu mo dri ma med byin lung bstan pa'i mdo）によって，いま般涅槃後二千百年から赤面国（gdong dmar can gyi yul）に広まると授記されたとおりである」となっている．『無垢女に与える授記の経』とは漢訳の『得無垢女經』であろうと思われるが，竺法護の異訳にも該当箇所が見当たらない．北蒙古に関しては，

> 北蒙古國．先福果熟生王．名曰成吉思（二合）．始成吉思．從比方王多音國．如鐵輪王[17]．

とあって，「從比方王多音國」の意味が明瞭でないが，チベット語訳では

> 佛滅後三千二百五十年，北蒙古國に（byang phyogs hor gyi yul du）先世の功徳の果が異熟した（sngon bsod nams bsags pa'i 'bras bu smin pa）ジンギス王（jing gir rgyal po）というものが生まれ，かれは北から〔征服し〕始めて（brtsams te）民族の言語が一つではない多くの地方（skad rigs mi gcig pa'i yul khams du ma）[18]を統一して（dbang du byas nas）勢力によって輪を転ずるもの（stobs kyis 'khor los sgyur ba）のようになる[19]．

となっている．沙羅巴が漢訳をしたときに，本来の「勢力によって輪を転ずるもの（stobs kyis 'khor los sgyur ba)」を「鐵輪王」とすることによって，ジンギスカンの本名「鐵木真（Tamojin)」を暗示して訳している[20]．

ジンギスカンののち，フビライが王位に着いて佛教に帰依し教法によって民を化し，佛教が益々栄え，フビライには真金を長男として三人のこどもがいて，釈迦族の王家の種族が今の王家の種族に至っているとしている．また，世界の生成に関して『倶舎論』などにはない独自の六劫説によって述べている[21]．これは『大毘婆沙論』における学説を整理したものであろうとおもわれる[22]．さらに住劫の説明ののちに小の三災など壊劫の説明がなされ，十二縁起が説明されている．十二縁起を世間品のなかで論じるのは，『倶舎論』とおなじ形式である．このなかで『倶舎論』と同じく分位・遠続・連縛・刹那の四種の縁起説を述べ，縁生によって世界が成り立つ外縁生と無明から行があるとする内縁生とがあると説明する．内外に分けて論じる縁生の説明は『倶舎論』にはないが，『大毘婆沙論』などに見える[23]有部独自の特殊な考え方であり，『大毘婆沙論』などはチベット語訳されていないから，パスパがかなり有部教学に精通していたことを物語る．ま

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

たパスパがアビダルマをよく理解していたことは有部の縁起説は位に約す連続縁起であるが，経部はこれを許していないとして，よくその特色を掴んでいることからも窺える[24]．この縁起の説明ののちに，色・心・心所・不相応・無為の五法の説明を行っている．心所法も四十六を数え，十大地法・十大善地法・六大煩悩地法・二大不善地法・十小煩悩地法・八不定地法を説明しており『倶舎論』とおなじである[25]．このなかで,『阿毘達磨集論』と『五蘊論』の名前がみえるから，これらも参照していたことがわかる[26]．

第3章道法品（26B ～ 29A, p.52-3 ～ p.55-5）では，資糧位のつぎに加行道で四善根，修道位で七覚支，十無学法で八正道と正解脱，正解脱知見について述べているが，特筆すべきことはない．

第4章果法品（29A ～ 34A, p.55-5 ～ 67-5）では，四沙門果について述べるが，種性地の説明では加行道では成佛できず，声聞・独覚となるだけであるという[27]．有部の教学では加行道を進んで行った者は声聞，独覚にはなれるが成佛できない．しかし『大毘婆沙論』では転根説を説いており，『彰所知論』のように声聞，独覚が成佛できないとはっきりと述べてはいない．成佛については,『倶舎論』に述べられている有部教学に則った三無数劫修行論を展開している．また佛身に色身と法身とがあるといい，色身は三十二相八十種好を自性身としていると述べ，この自性身は，教化すべきそれぞれの寿命・国土・根機の相違に応じて化身を現すと説いているが，有部教学にはない大乗の考え方が導入されている．また大悲について述べるが，これは大乗の所説であるとし，如来の十八不共法などは声聞乗のものが聞いたことのない法門であるとする[28]．また，「經云．乾慧地等八者．聲聞資糧道．即乾慧地．欲愛枯乾根境不偶．是所修善名乾慧地」とあり，「八人地」,「具見地」,「薄地」,「離欲地」,「已辦地」,「聲聞地」などの十地の名前が出てくる．有部教学における十地とは，欲界・中間定・四根本定・四近分定のことである[29]から，大乗の十地説を採用していることになる[30]．パスパが引用した経典は不明だが,『大般若經』辺りであろうと思われる．

第5無為法品（34A ～ 35A, p.67-5 ～ 69-6）では，有部教学の三無為をのべ，有部では実有とするが，経量部は「無有造作[31]」として仮有であることを述べる．また真如は無為ではないのかという質問に対して，真如は無我ということだが，声聞乗では法無我を説いていないと説明している[32]．パスパ自身が依用した『阿毘達磨集論』は，善法真如・不善法真如・無記法真如・虚空・非択滅・択滅・不動・想受滅の八を無為とし[33],『五蘊論』は虚空・非択滅・択滅・真如の四無為

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

説であるが，パスパは『倶舎論』によって有部の三無為説を採用している．これに対する質問が「真如無為説」であり，『阿毘達磨集論』によって人法二無我が真如であると答えている[34]．これなどもパスパが単に有部教学の説明だけに終わらず，大乗佛教の立場から佛教の基本的な考え方を真金太子に教えるという態度が窺えられる．

『彰所知論』の最後には偈頌があり，叡智なる真金太子のしばしばの請いに応じて，『起世經』やアビダルマによってこの論を作成したこと，これを学ぶ智者は所生の善根を虚空界に周遍して我と諸の衆生とともに無上果を証することを願う[35]として結んでいる．

小結

常念の『佛祖歴代通載』は，『彰所知論』の「器世界品」と「情世界品」を転載し，讃歎文を載せ，『孟子』「公孫丑篇」[36]を引用して「軻書所謂五百年必有王者興．其間必有名世者．誠哉是言也．迨我．皇元．混一區宇．萬邦咸寧．敬崇佛乗．禮請[37]」と述べて，フビライの出現と帝師となったパスパを歓迎している．また常念は『彰所知論』が概ね『正法念處經』『日藏經』『起世經』アビダルマなどの経論によっているとしながらも，空劫と隣虚粗大についてパスパの理解に混乱があったことを指摘している[38]．「隣虚」とはparamāṇuのことで，玄奘は極微と漢訳し，真諦が「隣虚」と訳しており，極小単位のことである．真諦訳では七隣虚を一阿羅（aṇu）とするのであるが[39]，漢訳『彰所知論』は「是等大種最極微細者曰極微塵．亦名隣虚塵．不能析釋．彼七隣虚為一極微．彼七極微為一微塵」として，ここでは極微細を極微塵，隣虚塵とし，七隣虚を一極微とし，七極微を一微塵としている．チベット語訳は「これらの大種の最微細の究極（shin tu phra ba'i mthar thug）が極微（phra rab kyi rdul）であり，分析できない（gzhig tu med pa）から，部分のない性質のもの（cha med pa nyid）である．この７つは微量（phra rab）である．この７つが金塵（rdul phran）である」とあって，漢訳のように「最極微細」を「極微塵」と「隣虚塵」とに分けてはいないから，漢訳者沙羅巴による真諦訳の用語を用いた付加訳であることがわかる．

「空劫」については先に指摘したように，有部教学では四劫説であるのに，中劫と大劫を加えて六劫とするパスパ独自の数え方の相違であって，中劫，大劫のそれぞれを誤解しているわけではないから，常念の考えすぎである．

騎馬民族として大陸を大進撃していた蒙古人たちに佛教を弘め，フビライをし

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

て政道が佛心に適うようにせしめたパスパの功績は絶大なものがあると常念は讃えている．本来ならば，帝国の万世の興隆を保証するところを『彰所知論』は，アビダルマの世界観を説き明かし，いつかは壊劫の時代を迎えることを予測し，不善を行うならば，必ず地獄や餓鬼の世界に堕ちることを明らかにして，善き行いを奨励している．パスパは『倶舎論』，『阿毘達磨集論』，『五蘊論』，『起世經』，『正法念處經』，『日藏經[40]』，『大般若經』などを参照している．パスパは佛教学概論として『倶舎論』などを基本にしながら，大乗佛教の世界観を導入し，『大般若經』の十地を取り入れるなどしているが，大乗佛教との根本的な相違は心心所を説明するときに，唯識教理を使わず，あくまでも『倶舎論』を主体としている．また『般若經』を参照しながら，大乗の空思想を述べているところはほとんどないのも特色の一つとしてあげられよう[41]．パスパに有部律に関する著作があることから，有部教学の立場で『彰所知論』を述作したということは確かである．

1）デルゲ版の蔵外文献は Tibetan Buddhist Resource Center 発行の Sa skya bka' 'bum vol.15. Chos rgyal 'Phags pa'i 'bum を使用．略号を Chos rgyal. とし，p.38-1 は p.38 の 1 行目を示す．

2）陳寅恪「彰所知論與蒙古源流」(1931)，『陳寅恪史學論文選集』（上海古籍出版社，1992 年）

3）P. C. Bagchi "*Chang so che lu (Jñeya-prakāśa-śāstra)—— An Abhidharma Work of Saskya-Pandita of Tibet*" in Sino-Indian Studies, Vol. 2, Calculta 1947, (pp.136 ～ 156).

4）Constance Hoog：*Prince Jin-Gim's Textbook of Tibetan Buddhism*, E. J. Brill-Leiden, 1983 (126 pages)

5）王啓龍『八思巴生平與〈彰所知論〉對勘研究』（中國社會科學博士學位論文文庫），中國社會科學出版社 1999 年，『八思巴評傳』民族出版社，1998 年

6）王啓龍「《彰所知論》傳承過程及〈情世界品〉補訂」『中華佛學學報』第 15 期 (p367-397)，臺北：中華佛學研究所

7）沈 衛榮「再論『彰所知論』與『蒙古源流』」『中央研究院歴史語言研究所集刊』77-4, 2006, pp. 697-721．モンゴル語訳 *Medegdekün-i belegetey-e geyigülügči ner-e-tu šastir* と英語序文が東京外大から出版されている．*"The Explanation of the Knowable" by 'Phgas-pa bla-ma Blo-gros rgyal-mtshan*, Vladimir Uspensky, Research Institute for Languages and Culures of Asia and Africa, Tokyo 2006.

モンゴル語訳はチベット語訳からのものであるが，サンスクリット語の音写はウイグル語から還元されたものであるとの指摘がなされている．Uspensky [2006] Introduction

8）岩鶴 密雲「西蔵王乞口双提賛の年時に就いて」『密教研究』71, 1939

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

矢崎 正見「パクパの教学について」『印度学仏教学研究』13（7-1），1958
金岡 秀友「Indian Buddhist thought as it appears in the Mongolian historical works from the Abhidharmakośa reconstruction as found in Shêng-sê-chih-lun 彰所知論 of ḥphags-pa」『印度学仏教学研究』14（7-2），1959
阿部 真也「彰所知論における宇宙論」『宗教研究』335，2003

9）「彰所知論序」T.32,226a

10）『彰所知論』T.32,236c

11）パスパの亡くなった歳については異説もある．王啓龍は，壬寅は戊寅（1278）の間違いだという．（王啓龍「《彰所知論》傳承過程及〈情世界品〉補訂」『中華佛學學報』第15期（p367-397），臺北：中華佛學研究所）詳細は拙稿「蒙古襲来を巡る二人の佛教僧」（坂輪宣敬博士古稀記念論文集『佛教文化の諸相』所収）

12）Constance Hoog〔1983〕Introduction

13）王啓龍〔2002,p.373〕, Constance Hoog〔1983,p. 5〕

14）Chos rgyal.p.38-1, 此洲向西有烏佃國．大金剛宮持種所居．金剛乘法從彼而傳．南海之中山曰持舡．觀音菩薩居止其頂．聖多羅母居止山下．東有五峯．文殊菩薩居止其上．（『彰所知論』T.32,231b）

15）但し，『阿毘曇毘婆沙論』（T.28,50a）のように阿修羅を加える説もある．『大毘婆沙論』（T.27,868b）は阿修羅趣を認めないが，阿修羅の説明をしている．

16）『彰所知論』に述べられている釈迦族から蒙古族への歴史は，『蒙古源流』をもととしたものであることが，確かめられている．（陳寅恪『《彰所知論》與《蒙古源流》』1931，沈 衛榮「再論『彰所知論』與『蒙古源流』」『中央研究院歴史語言研究所集刊』77-4，2006，pp. 697-721）

17）『彰所知論』T.32,231b

18）陳寅恪〔1931,p.70〕が「多音」を蒙古と誤読したことについて王啓龍〔2002,p.381〕がその間違いを指摘している．

19）Chos rgyal.p.38-1

20）王啓龍〔2002,p.382〕

21）劫有六種．一中劫（或名別劫）．二成劫．三住劫．四壞劫．五空劫．六大劫．一中劫者．或贍部人從無量歳．漸漸減至八萬歳時．即成劫攝．從八萬歳．減至十歳謂中劫初．復增八萬歳．減至十歳．為一轆轤．（（『彰所知論』大正蔵 32,230c））．六劫説は「世間施設」のなかに説かれているとの指摘が学会であり，精査したが判明しなかった．指摘者の勘違いか．

22）『大毘婆沙論』T.27,700c

23）如説眼縁色生眼識．若後為前因．應當縁眼識生色．如父母是兒因．若然者應兒是父母因．違如是等<u>内縁生法</u>．云何與<u>外縁生法</u>相違．如種子為牙因．乃至花為果因．若然者應牙為種子因．乃至果為花因．若後為前因．復有大過．何以故．不作業而受果．已作業而無果故．（『阿毘曇毘婆沙論』T.28,35a）
若是因者．便違<u>内外縁起諸法</u>．違内法縁起者．謂應行縁無明．乃至老死縁生．父母因子．眼色因眼識．乃至意法因意識．又應羯邏藍因頗部曇．乃至壯因於老．如是等違<u>外法縁</u>

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

起者．謂應種子因芽．乃至花因於果．如是等復有大過．謂應未造業而受果．受果已方造業．（『大毘婆沙論』T.27,47a）

24）『倶舎論』（T.29,48c）では，「傳許約位說　從勝立支名　論曰．傳許．世尊唯約分位說諸緣起有十二支．若支支中皆具五蘊．何緣但立無明等名」としていて，世親の不信を表している．

25）『倶舎論』を参照していることは，「染污定分名曰散亂．對法藏論無如是說」（『彰所知論』T.32,233b）からも明白である．

26）對法集論并五蘊論．說十一善．（『彰所知論』T.32,233b）

27）種性地者．即加行道．必不成佛．定成聲聞獨覺種性．名種性地．（『彰所知論』T.32,234c）

28）但し，チベット語訳は，「十八不共法と三不護などは大乘から生じたものであるというが，噂そのものである」として，大乘に属するものの中に大悲を入れていない．

29）地者是十地．謂欲界中間禪根本四禪四禪邊．（『大毘婆沙論』27,154a）

30）何為初地乃至十地．所謂乾慧地，性地，八人地，見地，薄地，離欲地，已作地，辟支佛地，菩薩地，佛地．（『摩訶般若經』T.8,261a）

31）一切有部許有實物．經部師說無有造作．（『彰所知論』T.32,236b），Chos rgyal. p.68-3

32）問真如豈非無為耶．答彼即無我．以聲聞乘不說法無我故．（『彰所知論』T.32,236b），Chos rgyal. p.68-3

33）『阿毘達磨集論』（T.31,666a）

34）『阿毘達磨集論』T.31,666a

35）種相富具足　叡智皇太子　數數求請故　慧幢吉祥賢　念住日藏論　起世對法等
依彼造此論　有情所知論　機宜有無邊　纂略列為五　謂器情道果　并無為法等
故今明開示　冏冏曉解者　惟茲彰所知　解已復示他　此論文句等　乖義懈怠過
智者并啓請　惟願垂忍納　所生諸善根　周遍虛空界　我共諸眾生　願證無上果（『彰所知論』T.32,236a）

36）孟子去齊．充虞路問曰，夫子若有不豫色然．前日虞聞諸夫子曰，君子不怨天，不尤人．曰，彼一時，此一時也．五百年必有王者興．其間必有名世者．由周而來，七百有餘歲矣．以其數則過矣．以其時考之，則可矣．夫天未欲平治天下也．如欲平治天下，當今之世，舍我其誰也．吾何爲不豫哉．（『孟子』「公孫丑篇」13）

37）『佛祖歷代通載』（T.49, 490a）

38）大概依念處日藏起世等經論對．法相應之義．而錯綜其宏綱爾．苟非具大智辯窮法實相．其孰能明空劫隣虛之細大．昭然如庵摩勒果觀於掌中哉．（『佛祖歷代通載』T.49, 490a）

39）以隣虛為初．應知後後皆七倍增．七隣虛為一阿羅．（『倶舎釋論』T.29,220a）

40）『大方等大集經』「日藏分」（T.13,233a ～ 298a）

41）わずかに「實有與我非一蘊故名空」「以聲聞乘不說法無我故」と述べており，大乘の空思想とは別の立場で，有部教学をまとめたことは明らかである．

〈キーワード〉『彰所知論』，『倶舎論』，フビライ，パスパ（パクパ），真金

（立正大学教授，文博）

NII-Electronic Library Service